

農推 第2813号
平成29年12月15日

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

病害虫発生・防除情報メールサービス（12月）

大阪府内の12月の病害虫発生状況と今後1か月の防除対策についてお知らせします。
果樹の休眠期防除の時期です。次作のためにしっかりと対策しましょう。

- 各病害虫の発生状況は、巡回調査や植物防疫協力員の報告等をもとに作成しています。
- 各病害虫の詳細や、農薬を使用しない防除方法等は、下記ホームページの「防除指針」を参照してください。
- 新たな農薬の評価手法（短期暴露評価）が導入されることに伴い、登録変更（変更申請中のものを含む）によって、使用が制限される農薬がありますので注意してください。

詳しくは、販売店で提供されるチラシ等や下記ホームページを確認してください。

- ◎ 「病害虫防除グループホームページ 防除指針」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/>
- ◎ 短期暴露評価により変更される農薬の使用方法の周知等について
http://www.jppn.ne.jp/osaka/H27nd/ARfDtutu/ARfDH27_top.html

目次

1	水稻	P. 1
2	果樹(温州みかん)	P. 2
3	野菜(トマト・ミニトマト、あぶらな科野菜、たまねぎ)	P. 3~4

水稲

今年発生した病害虫を次作に持ち越さないように防除しましょう！

いもち病、もみ枯細菌病、ばか苗病、内えい褐変病、イネシガラレセンチュウ



穂いもち

防除のポイント

- ◆ 収穫後にできるだけ早く耕うんする。
- ◆ 自家採種する場合は、上記の病害虫が発生した水田のもみは種もみとして使用しない。

縞葉枯病・ヒメトビウンカ



縞葉枯病（ひこばえ感染株）

特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病である。
- ◆ 発病したひこばえをヒメトビウンカが吸汁して、保毒する。

防除のポイント

- ◆ 例年発生が確認されている地域では、今年もひこばえでの発生が確認された。
ひこばえ感染株は本病の伝染源となる恐れがあるので、早めに刈り株をすきこみ、ひこばえを処分する。

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）



成貝

特徴

- ◆ 食害が激しいのは田植え後約20日間までで、成長して硬くなったイネは食害しない。
- ◆ 年々発生地域が拡大している。

防除のポイント

- ◆ 刈り取り後、耕うんして貝をひき潰したり、地表で寒気にさらし凍死させて、越冬貝を減らす。
- ◆ 耕うん機などに土と一緒に付着することがあるので、移動の際はしっかり土を落とす。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、ラベルの登録内容を確認してください。

果樹

12月前半の病害虫発生状況

品目	程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
温州みかん				ミカンハダニ		
				カイガラムシ類		

温州みかん

ミカンハダニ、カイガラムシ類



ミカンハダニによる葉の被害※



ナシマルカイガラムシ※



フジコナカイガラムシ※

特徴 ミカンハダニ

- ◆果実や葉に寄生、吸汁して変色させる。
- ◆日当たり、風通しの悪い密植園や枝葉の混みあったところで多発する。
- ◆冬期は低温のため、増殖は抑えられるが、生息はしている。春になり暖かくなると、増殖を開始する。

特徴 カイガラムシ類

- ◆葉や枝、果実に寄生し多発した場合は、樹勢が落ち、果実の商品価値を低下させる。
- ◆ナシマルカイガラムシは以前はサンホーゼカイガラムシと呼ばれていた。

防除のポイント

- ◆収穫後の園では、越冬期に、**機械油乳剤95**、**ハーベストオイル**、**スプレーオイル**（いずれもかんきつ登録）等を散布する。
- ◆厳冬期は薬害を生じる恐れがあるため、12月下旬までに散布できなかった場合は3月頃に散布する。

野菜

12月前半の病害虫発生状況

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
トマト・ミニトマト (施設栽培)			すすかび病		
			トマト黄化葉巻病 (TYLCV)・コナジラミ類		
あぶらな科野菜 (キャベツ、こまつな、 しろな等)				コナガ	
				菌核病	
たまねぎ			べと病		

トマト・ミニトマト(施設栽培)

すすかび病



被害葉※

特徴

- ◆日照不足で樹勢が落ちると発生しやすい。本年は台風と長雨のため発生がやや多い傾向にある。
- ◆近年増加傾向にある。葉かび病よりかびが黒く見えるが、見分けることは困難。葉かび病抵抗性品種で症状が見られる場合は、すすかび病を疑う。

防除のポイント

- ◆発生を認めたら、トリフミン水和剤（前日まで）、ファンベル顆粒水和剤（トマトのみ、前日まで）などを散布する。

トマト黄化葉巻病(病原ウイルスTYLCV)・コナジラミ類



トマト黄化葉巻病発症株

特徴

- ◆トマト黄化葉巻病（病原ウイルスTYLCV）は、コナジラミ類により媒介される。

防除のポイント

- ◆感染すると株ごと除去する以外に対策がないので、コナジラミ類の防除を徹底する。
- ◆感染株からの二次伝染を防ぐため、除去した株はビニル袋等に密閉して完全に枯死させる。
- ◆ほ場周辺の雑草、特に野良生えトマトの除去を徹底する。
- ◆施設開口部に目合0.4mmのネットを展張する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、ラベルの登録内容を確認してください。

あぶらな科野菜（キャベツ、こまつな、しろな等）

コナガ



成虫※



幼虫※

特徴

- ◆一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆同じ系統の薬剤を連用しないよう注意する。

菌核病



キャベツの発病

特徴

- ◆長雨や強風雨によって発生が助長される。
本年は台風と長雨により発生が多い傾向にある。

防除のポイント

- ◆菌核が土中に残って伝染源になるので、被害株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆なばなやレタスなど、本病が発生しやすい作物との連作を避ける。
- ◆予防的に薬剤を散布する。

※薬剤については農作物病害虫防除指針を参照

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>



たまねぎ

べと病



べと病（苗における発病状況）*

特徴

- ◆苗床・定植後に、作物残さなどから感染し、越年罹病株として翌年1～2月に病徴を現し、次作の発生源になる。

防除のポイント

- ◆予防散布として、ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤（3日前まで）、ランマンフロアブル（7日前まで）を散布する。

※ジマンダイセン水和剤とペンコゼブ水和剤は同一成分（マンゼブ）。マンゼブの総使用回数は5回以内。

- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)
- 農薬を使用する際は、ラベルの登録内容を確認してください。